

ステーキの解消 西部開拓史の闘志の秘密

マドロスさんにパイプたばこがつきものなら、さしずめ西部男のカウボーイに欠かせないのが「ビーフジャーキー」(牛肉の干し肉)だった。

コロンプスのアメリカ大陸発見によって世界中に広がったものに、たばこやトウモロコシ料理があるが、これらは説明するまでもなく新大陸に渡ったヨーロッパ人たちが現地のインディアンから教えられたもの。ただし、当の西部人たちは、そのたばこやトウモロコシよりもこのビーフジャーキーにもっとも強くとりつかれたのだった。

西部劇映画の中のカウボーイたちは、いつもこのビーフジャーキーをチューインガムのようにむしゃむしゃかんでいる。軽くて、火をおこさなくてもそのまま食べられるところが携帯食にうってつけで、西部開拓の進行とともに、このジャーキーは急速に西部人たちの必需品となっていた。

ところでわれわれは、いらいらしたときにハンカチをかんだり、エンピツに歯を立てたりする人をよく見かける。これは本能的な行為で、ものをかむのはストレス解消の一手段なのである。精神生理学的な説明によると、人間はいらいらしたときや空腹時など、体内に多量のアドレナリンとよばれるホルモンが放出される。これは、いつてみれば闘争ホルモンとで

もよぶべきホルモンで、人はその結果ケンカつ早くなる。空腹などときにはこのアドレナリンが刺激となって、獲物を獲る本能がよびさまされ、ひもじさを満たそうとするのである。

だから、体内にアドレナリンがあふれた状態をそのままにしておくと、人はなんとなく落ち着かず、いらいらして何かをしでかしたくなる。

ハンカチやエンピツをかんだりするのもそのひとつで、この場合、ものをかむと、たとえ空腹は満たされなくても、なんとなく気分が落ち着くのである。

だから、硬いものをかむことの好きな人は、わりに落ち着いた雰囲気を持ただよわせている。逆に、ソフトな食べものを好む人間は、いまの子供たちのように情緒不安定で落ち着きがない。

いいかえると、現代のようにストレスいっぱい、欲求不満がうず巻いている時代には、ものをかむことはイライラ解消の手っ取り早い方法となる。

つまり——西部開拓時代の開拓者や、カウボーイたちがビーフジャーキーにとびついたのは、開拓という激労に耐えぬくための本能的な知恵だったのである。

ワンポイント知識

ティーボーンステーキ

牛肉のカット方法で、サーロインに骨をつけたまま、内側に付いているヒレを同時にカットしたものです。断面の骨の形状がT字型をしているので、このように呼ばれています。

風味の良いサーロインと軟らかいヒレが同時に味わえる、極めて豪華な最高のステーキ・カットです。